

 アフガニスタン、ハンガリー人、猪谷六合雄

書評者名：米原万里 | 初出：週刊文春「私の読書日記」 | 初出年月日：2002年1月24日

前回一月二九日号でアメリカによるアフガニスタン空爆を非難したところ、さっそくアメリカ在住の日本人の方からお手紙をいただいた。同時多発テロで命を奪われた人、失職した人があり、経済全体が打撃を受けて収入が落ちているなど甚大な被害を受けているのだからアメリカが報復するのは当然である、という文面だった。空爆によって、ニューヨークの被害者と同じように無実の多くのアフガニスタン人が命を奪われ傷つけられ、住む場所を奪われることには、想像力が及ばないのだろうか。その論理で行くと、広島、長崎への原爆投下をも正当化することになるが、それでもいいのだろうか。

その手紙の中に、仏像を破壊するような輩を懲罰するのに躊躇する理由はない、という文言があった。おそらく昨年三月にタリバンがバーミヤンの世界最大の石仏を破壊したことを指しているのだろうが、そう言い切る前に、ぜひともモフセン・マフマルバフ著『アフガニスタンの仏像は破壊されたのではない恥辱のあまり崩れ落ちたのだ』（武井みゆき、渡部良子訳 現代企画室 一三 円+税）を読んで欲しいと思った。

マフマルバフは、イランを代表する映画監督で作家でもある。『サイクリスト』に続き昨年完成した『カンダハール』（カンヌ映画祭エキュメニク賞およびユネスコ「フェデリコ・フェリーニ」メダル受賞）のロケのためアフガニスタンについて「およそ一万ページのさまざまな本や文書を研究し」つづさに現地を観察する機会を持った。石像破壊について、貴重な文化財の破壊だと世界中が抗議の声を上げた最中に本書に収められた告発文は書かれている。巻頭で、著者は警告する。「この苦しい題材が、あなたの心地よい生活に無関係だと思うなら、どうか読まずにいてください」と。



アフガニスタンの
仏像は破壊された
のではない 恥辱
のあまり崩れ落ち
たのだ



異星人伝説



猪谷六合雄

ソ連軍が引き上げた後も続いた内戦で荒廃した大地を未曾有の旱魃が襲う。難民が数百万単位で発生する生き地獄の中で餓死者の数が百万を超え、さらに増え続ける。「私は、ヘラートの町はずれで、二万人もの男女や子どもが飢えて死んでいくのを目のあたりにした。彼らはもはや歩く気力もなく、皆が地面に倒れて、ただ死を待つだけだった」「私たちのチームが懐中電灯を持って荒野を調査していたのだが、アフガニスタンから逃げてきた難民たちが、羊の群のように荒野にうち捨てられ、死の淵にいるのを見た。コレラで死にかけているものと思い、ザーボルの病院に連れて行くと、実は彼等は餓死しかけているのだと知った」

「タジキスタンのドゥシャンベで、私は一万人のアフガンの人が南から北へ徒歩で逃げる場面を見た。あたかもそれは、最後の審判の荒野のようであった。これらの映像を世界のメディアは少しも報道しない。戦争で傷ついた、裸足の飢えた子どもたちが、何キロもの道を逃げてきたのだ。その後、この逃げる群衆は、背後からは国内の的に攻撃され、逃げようとする先のタジキスタン側からは受け容れられなかった。そして千人また千人と、アフガニスタンとタジキスタンの間にある無人の土地で彼等は死に、さらに死に、さらに死んだ」

石仏破壊には大騒ぎした世界も、石仏破壊よりもはるかに以前からアフガニスタン全土を覆っていたこの悲惨な現実に対しては無関心だった。手を差し伸べれば救えるだろう命が次々と絶たれていく事実は無視してきた。アフガニスタンの人たちは「世界の無知の中で死に、さらに死に、死に続ける」二千万人の飢えた国民の内、三％は難民となり、一％は死に、あるいは殺され、残りの六％は餓死寸前である。

ついに著者は本書のタイトルにもなった真理に到達する。石仏は「あれほどの威厳を持ちながら、この悲劇の壮絶さに自分の身の矮小さを恥じて崩れ落ちたのだ。仏陀の清貧と安寧の哲学は、パンを求める国民の前に恥入り、力つき、砕け散った。仏陀は世界に、このすべての貧困、無知、抑圧、大量死を伝えるために崩れ落ちた。しかし怠惰な人類は、仏像が崩れたということしか耳に入らない。こんな中国の諺がある。

『あなたが月を指させば、愚か者はその指を見ている』誰も、崩れ落ちた仏像が指さしていた、死に瀕している国民を見なかった」

ちなみに長年現地で医療活動をしている中村哲氏は、石仏破壊は雨乞いのために行われたらしいと述べていた。

恐ろしいのは、本書で述べられている現実には空爆が始まる以前のこと、その後の事態の急変でさらに生活基盤を失った難民が増え、いま厳寒がアフガンの大地を襲っていることだ。

×月×日

大道芸人にして数学者のピーター・フランクルとか、『悪童日記』の著者アゴタ・クリストフとか、『歯とスパイ』の著者ジョルジョ・プレスブルゲルとか、五カ国語の同時通訳者にして一六カ国語の翻訳者ロンブ・カトーとか、ルービック・キューブのルービックとか、ハンガリー人、とりわけユダヤ系の人には独創的な才能の持ち主が多いなど以前から不思議に思っていた。だから、マルクス・ジョルジュ著『異星人伝説 二〇世紀を創ったハンガリー人』（盛田常夫編訳 日本評論社 二九 円＋税）を目にしたとたんに、読まずにはいられなくなった。なぜ人口わずか一千万のヨーロッパ辺境の小国が二 世紀を通してユニークな天才たちを世界に供給し続けることができたのか、その謎に迫る研究である。

第一部では異星人伝説が生まれる理由を概括する。異星人とは四回にわたるディアスポラによって母国を離れその才能を花開かせて世界的名声を得たハンガリー出身者たちを指す。印欧語とは異なる文法や音韻体系が欧米人に不可思議な人々の印象を与えたこと。「ハンガリーは歴史が交差する地帯であった」ため「ローマからカトリックが、ドイツからプロテスタントが、ロシアから東方正統キリスト教が、オスマン・トルコからはイスラムがこの地で出会い」さらには「五百年前に西欧を追い出されたが、東欧では交易と産業をもたらす民族として歓迎された」ユダヤ人が大量に流入した結果、「寛容な共存と文化的な衝突との矛盾は、（中略）若い個人の頭の中でも存在する。父がハンガリー語を母が

ドイツ語を話し、祖父の家系がポーランドのどこからかの出身で、祖父はユダヤの祝祭日を祝い、学校ではキリスト教を教えるということが珍しいことではない」こと。だからこそ、「彼等は生来、学際的な精神を持っている」こと。

第二部は、アメリカの原爆・水爆開発に貢献したテラーやスィラー、物理学・数学・生物学で創造的な業績を残したノイマン、ヘッジ・ファンドの創設者ソロス、インテル中興の祖グローヴ、ビタミンCの発見者セント・ジョルジィなど、科学者を中心とした二人のハンガリー人の取材と調査をもとにした評伝からなる。

そして、一番面白いのは第三部で、彼等天才たちが単なる偶然の賜ではなく、ハンガリーのギムナジウム（高等学校）が極めて優れた才能発見&発達システムを擁していたことを具体的に紹介している。たとえば、流体力学のパイオニア、カルマンは、高校時代を次のように回想する。「ラテン語の授業では、文法から始めるのではなく、街を回って、銅像や教会や博物館などで使用されているラテン語の銘を模写してくるように言われた」「そうして集めた句をクラスに持ちかえり、先生がどの言葉を知っているのか尋ねたものだ」「それから、先生は同じ言葉が違った形になっていることに気がついたかどうか尋ね、どうして形が違うのだろうかと疑問を發した。他の単語との関連で、異なる形をとっていたからである」「こうした訓練を積み重ねることで、自然にラテン語の語彙が豊富になり、ラテン語の変化における基礎的なルールを導き出すことができた」

感動的なのは、功なり名を遂げた科学者たちが何十年も昔の少年時代の授業の細部を、こんな風にまるで目の前のことのように覚えていることだ。

×月×日

高田宏著『猪谷六合雄』（平凡社ライブラリー ー 円+税）を読了。この評伝を読むまで猪谷六合雄なる人物が存在したことさえ知ら

なかったが、今では会う人ごとに片っ端から話して聞かせたくなった。
こんな日本人がいたこと自体が嬉しくなるような快男児なのである。

日本のスキーの草分けの一人で、一九五六年冬季五輪スキーの回転で銀メダリストとなった猪谷千春の父親である。が、「とてもスキーヤーという呼び名で片付けるわけにはいかない。二十世紀の巨人の一人であった」、彼の「石器時代と現代を同時に生きる」「貧乏を恐れぬ」生き方そのものが現代文明への強烈な批判になっていると著者は言い、鶴見俊輔は本書の解説の中で、「生きることを自分の仕事と信じて生きた」希有な日本人としている。

「お金のために働いたことのない」猪谷にとっては、労働は遊びでもあり、住む場所もまた、自由奔放に選んでいく。戦前、戦中にジャワであれ、千島列島であれ、思い込んだら出かけていってしまうのだから爽快である。「生涯放浪する人であったこの巨人は」「行く先々で、住む家を自分の手で、自分の労働で、何軒も建てている」「ほとんどお金が要らないだけでなく、この人独自の考案が住居の隅々を実現される」。それが実に楽しそうなのである。さらに手づくりで生活用具もスキーもゲレンデもシャンツェも作ってしまう。七歳を過ぎてから運転免許を取得すると、マイクロバスを住居に改造して日本中を放浪し続け、九五歳で大往生を遂げる。

著者がそんな彼をヘルマン・ヘッセの『クヌルプ』に喩えているのが印象的である。一生放浪し続けたクヌルプが雪の山中で孤独に死んでいく間際、神と対話する。自分は何も世のためにせずただ遊び暮らしていたと懺悔するクヌルプに対して、神は、言う。それで良かったのだ。家庭に安住してしまっている人びとに、自由な生活へのあこがれをかき立てる役割を自分がお前に与えたのだから、と。

収録：(2005/05/20現在)書籍未収録

for inquiries and comments, e-mail to info@impala.jp
Copyright © 2001 impala co.,ltd.All Right Reserved.